



第2部

山づくり
人づくり
ものづくり
チャレンジ!

事

私たちのチャレンジ!

例

大洲産原木シイタケの食育活動

おおよ
大洲市女性林業研究グループ「愛媛県」

女性も林業の分野で活躍したい

私たちが住む愛媛県大洲市は「伊予の小京都」と呼ばれ、昔ながらの街並みと美しい田園風景や山々が特徴です。市の中心部を清

流「じしかわ 脈川」が流れており、歴史を

感じさせる情緒あふれる名所の

数々が今も息づいています。

この素晴らしい景観が整った当地域では、昔から林業が盛んに行われてきました。その中で女性も

林業の分野で活躍できる

場所が作れないかと考

ていたおり、県下各地に

女性のみで組織された林業研究グループがあることを知り、大洲市女性林



郷土料理の「大洲いもたき」づくりで食育活動



地元で愛され続ける「大洲いもたき」は、あたたかく優しい味わい



女性からの視点で活動を進める
大洲市女性林業研究グループ

業研究グループを作りました。

楽しく・おいしく
伝統を継承する料理教室

私たちのグループでは、原木シ



毎年行う小学生のシイタケの植菌体験では、会員が指導を行う

イタケの生産振興、需要拡大に貢献するため、シイタケの「生産」から「食」までの一連の流れに沿った森林環境教育プログラムを実施しています。小学生を対象に、地元の特用林産物である「乾シイタケ」の生産の工程を学ぶことを目的に植菌体験をしています。植菌後は、2年後に収穫できるシイタケを楽しみに、水やりを定期的に行い、ホダ木の管理をしてもらっています。

また、小学生の親子料理教室も毎年行っており、郷土料理の「大洲いもたき」づくりを題材に「大洲産原木乾シイタケ」をふんだんに使った料理を作ります。

乾シイタケは、いもたきには必ず必要な食材です。里芋の収穫時期になると、乾シイタケでとった甘めの出汁に里芋・戻したシイタケ・鶏肉・油揚げ・こんにゃくなどをふんだんに入れて作ります。各家庭で少しずつ味が異なり、客人に振る舞う料理

としても定番です。親子で料理を作る機会が近年減っている中で、地元の郷土料理のいもたきを通じて親子で作る楽しさを経験できる料理教室は好評です。

この事業は、約20年前より毎年続けていますが、大洲市女性林業研究グループが関わって10年が経過します。今年も100

名程度の親子にご参加いただき、盛大に開催されました。今後も活動を継続し、愛媛県内で1番の生産量を誇る大洲市特産品「原木乾シイタケ」を全国へ発信し、老若男女問わず多くの方々に美味しく食べてほしいと思っています。

「美味しい・旨味たっぷり」の原木乾シイタケ・乾シイタケパウダー(粉末)は、地元の「大洲市森林組合」、

「大洲まちの駅あさもや」、「大洲市道の駅清流の里ひじかわ」などで販売していますので、こちらもご賞味いただければ幸いです。ご家庭やお土産でも喜ばれること間違いなしです。

大洲で愛される「いもたき」

また、先に述べた「大洲いもたき」は日本三大芋煮に選ばれ、郷土料理としてだけでなく、河川敷で鍋を囲み、美味しい料理に舌鼓を打ちながら、お互いの交流の場として、大洲の慣例行事のひとつとなっています。肱川の恵みが



「乾シイタケパウダー(粉末)」は戻す手間がかからず、煮物・みそ汁・お好み焼き・卵焼きなどに使えて手軽



県内1位の生産量を誇る大洲市特産品「原木乾シイタケ」を全国へ発信したい

もたらした大洲産の里芋は、ほくほくとしていて滑らかな舌触りが特徴的です。かつて「お籠もり」と呼ばれる慣習として大洲の人々に親しまれ、今も愛され続けるいもたきは、あたたかく優しい味わいです。

肱川の河川敷で行われる「大洲いもたき」は、毎年9月上旬から10月中旬までの間、開催しております。ぜひ、愛媛県大洲市へ来ていただき美味をご堪能ください。

*まとめ

大洲市女性林業研究グループ
会長 上野マリエ

事

私たちのチャレンジ!

例

百万ドルの森に夢をこめて

若桜町林業研究会「鳥取県」

優良材「若桜スギ」の産地

「みどり」と清流のまち」若桜町は、東は中国地方2番目の高峰・氷ノ山、西には東山、北には扇ノ山と1300m以上の中国山地の

山々にすり鉢のごとく四方が山に囲まれています。

総面積の94%は山林で覆われ、

成熟した若桜スギは優良材として信頼を集めてきた歴史があります。多雪地域に位置するため、積雪を考慮した植栽、造林、保育、伐倒、

搬出、木材加工、工務店建築等の技術など、優れた技術が息づいています。

昭和51年3月に若桜町林業研究会が発会してから、今年で46年を迎えました。現在、40歳代から90歳代の25名が所

属し、70歳代が主となっています。ここまで引率、先導していただいた大先輩に心から感謝しています。



銘木林と「百万ドルの森」標柱を再建立



銘木林は「0.5ha以上を有し、伝統的かつ町独自の施業形態を持つ貴重な森林」を当会で選定し、若桜町が指定



当会のメンバー。「生涯現役でがんばるぞ」を第一に活動中

銘木林3カ所と「百万ドルの森」を設定

若桜町には、銘木林が3カ所あります。伝統的な技術で育てられたスギやヒノキを対象に当会で選定し、平成6年10月に町が指定しました。平成7年5月には表示板を設置し、現在は子どもたちの学習の場や視察・交流に利用しています。

また、平成8年11月には「百万ドルの森」設定と林業研究会20周年記念植樹・標柱建立に挑戦し、緑化推進功労者として内閣総理大臣賞受賞の栄に浴す快挙となりました。



若桜町長と当会との意見交換会

した。「百万ドルの森」は、当時70年生だったスギの試験林（糸白見地区1・5ha）に設定したものです。130年生になれば約1億円以上の森になるという試算をもとに、夢をこめて名付けました。現在は96年生になり、当時より評価は下がるかもしれませんが、標柱を立てたことで「若桜町にも先人から受け継いだ見事な森が数多く残っていることを知ることができた」「優れた森や木を育てる機



町立若桜学園との森林学習を毎年実施している（氷ノ山登山）

運が高まった」「夢を持った」林業に取り組む人が増えた」という声を聞くことができています。

平成23年3月には、老朽化した標柱の再建と記念植樹に取り組みました。そして令和2年11月には、銘木林3カ所と「百万ドルの

森」の表示板を新しく標柱型に衣替えしました。森林所有者の方に再度自分の山に目を向けてもらおうきっかけになればと、努力を続けています。

会報「林研だより」を45年間全自治会に配布し全戸に回覧

「林研だより」は、会員や町・県・森林組合などからの寄稿文をはじめ、当会の活動状況、森林を取り



昭和52年から発行する会報「林研だより」は若桜林研の歴史書でもある

巻くニュース等を掲載した会報です。昭和52年5月に第1号を発刊し、今年で41号を数えます。町民へ正しく林業の現状を発信していくため、これまで町内全自治会に配布し、全戸回覧してきました。今後も情報の充実に取り組んで参ります。

若桜町林業研究会は、これからも各種研修、講演会、交流会、町立若桜学園（小中一貫校）への協働活動、地域への林業を取り巻く情報の提供、若手会員の加入促進に一丸となつてがんばりたいと考えています。

*まとめ

若桜町林業研究会
会長 伊井野政文

事

私たちのチャレンジ！

例



ハランを使用したフラワーアレンジメント

私たちが活動している長崎県東彼杵郡川棚町・波佐見町は、長崎県のほぼ中央に位置しています。地域の主な産業は農業ですが、波佐見町は400年の伝統を持つ

増収を目指して！ ハラン栽培の難題解決

とうひ
東彼林業研究会「長崎県」

複合経営による ハランの林間栽培

「波佐見焼」が有名なやきもの町でもあります。東彼林業研究会ではスギ・ヒノキの長伐期施業による大径木生産を目標とし、短期収入を得ることを目的に、林間栽培によるハランや原木シイタケの生産を行っています。

東彼林業研究会は昭和59年に発足し、現在は31〜93歳までの30名で活動しています。設立当初はキハダやオウレン等の薬草栽培を試みましたが、気候など

の影響から思ったような成果を出すことができない中、全国林業改良普及協会発

の影響から思ったような成果を出すことができない中、全国林業改良普及協会発



ハランを手作業で丁寧に収穫する会員

東彼林業研究会共同ハラン場 生涯現役!!



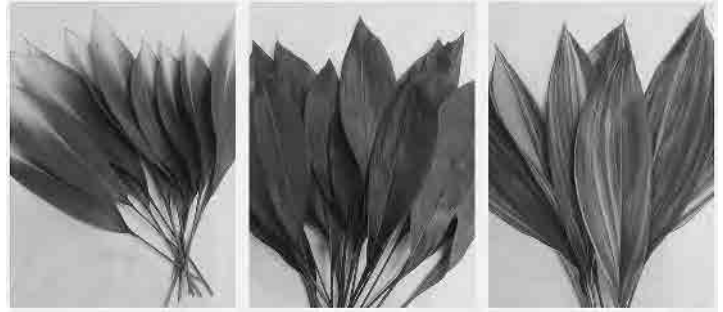
「生涯現役」をモットーに、会員は笑顔あふれる活動を行っています

行月刊誌「林業新知識」でハラン生産について取り上げられていたことをきっかけに取り組んだ経緯があります。

解決 シマハラン「青葉化」の

私たちが栽培しているハランは、アオ・シマ・アサヒの3種類であり、主に生け花やフラワーアレンジメントで使われます。また、抗菌・殺菌成分を含むことから料理の装飾や包み物など、さまざまな用途で活用されます。

3種類のハランの中で、花弁市場で最も高値で取り引きされる



左から、アサヒハラン、アオハラン、シマハラン

のが縞の斑入りのシマハランです。しかし、長く生産を続ける過程で斑入りの葉がなくなる「青葉化」の問題に直面しており、シマハラン出荷は全体の15%にとどまっています。長年その対策を検討していましたが、この度、長崎県農林技術開発センターとの研究協力によって、同じ株から発生すると考えられていたシマハランとアオハランは別個体であることが判明しました。「青葉化」の原因は、シマハランの親から発生した種子株のうち、斑入りになる割合が7%程度と低く、ほとんどがアオハランになっていることがわ



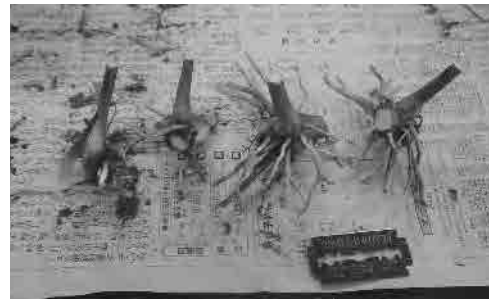
長崎県農林技術開発センターの研究員を招いた研修会で新技術「1節挿し」を習得

かりました。そのため、単価の高いシマハランを優先的に採取した結果、シマハランの植え付け個所でもアオハランの発生が増えたものでした。

そこで、シマハランの新しい増



植え付けから半年後のシマハラン。特徴である縞の斑もはっきり出現しています



「1節挿し」ではハランを地下茎の節ごとに刻み、植え付けを行って芽や根を発生させます

殖技術として、葉の付け根の節ごとにハランを切り、芽を出させる「1節挿し」によるクローン増殖方法が開発されました。これからは会員が増殖技術研修会を通して習得した「1節挿し」でシマハランを増やし、2026年頃にはシマハランの出荷量を現在の2倍、60万円以上の収益増を目指します。

「生涯現役!!」を目指して

東彼林業研究会は共同ハラン場に「生涯現役」と書いた看板を設置しています。これは、何歳になっても山に足を運ぶことで、足腰が鍛えられ、出荷作業には頭と指先を使うため認知症予防につながり、収入に結びつくことでさらに元気になる、という目標をもった会員でありたいという願いであります。私たちはハランの生産を通して、山間部の活性化を目指し、日本のハラン生産地を目標に「生涯現役」で頑張っていけます。

*まとめ

会長 松本義法

事

私たちのチャレンジ！

例

森林環境教育で次世代へつなぐ

富山地区林業研究グループ協議会「富山県」



雪起し体験。森林を維持する大変さと、自然を守る大切さを学ぶ



伐倒見学。木を元気に育てることで環境が整うと知り、自然の仕事に興味をもつ児童もいた

「次世代へつなぐ山づくり」を目標に活動

富山地区林業研究グループ協議会は「自分たちの山

は自分たちで管理する」「次世代へつなぐ山づくり」を目標に昭和42年から活動を開始しています。大沢野・細入・婦中・大山の4つの支部で構成されており、会員は43名、会員の所有森林面積は約1070ha、人工林は約380ha（人工林率は36%）となっています。

今回は「次世代へつなぐ山づくり」に着目し、本協議会で取り組んでいる「森林・林業

を知ってもらうための森林環境教育や普及啓発活動」を通じて、林業を担う後継者の育成についてご紹介します。

「次世代」の育成

「次世代へつなぐ山づくり」の目標のもと、「森林の情報」「森林を管理する技術」「集約化し整備された森林」の3つ



階段設置体験。できあがった時、嬉しそうにしていた



婦中支部の仲間と林業体験の小学生

を確実に次の世代につなぎたいと考えています。同様に、これらを引き継ぐ「次世代」の育成も重要と考えています。そこで、「森林との共生」が大切だという気持ちで育むために、小学生を対象とした森林環境教育や高校生を対象と



発表会の様子。「植えて、育てて、切って、使って、また植えて」という木の循環や、無花粉スギの内容が印象的

み、雪起し、下刈り、枝打ちなど、児童による林業体験活動を行ってきました。最近はこちらの体験を踏まえて、子どもたちが森林・林業について調べたことを私たちに発表してくれています。この体験活動は今年で15年目を迎え、地域の活動として根付いてきています。この先、森林環境教育を受けた子どもたちが大人になり、その子どもたちが

また、平成30年には県と連携し、土木工学科の高校生にハーベスタによる玉切り見学・ハーベスタへの乗車、防護具の着用・チェーンソーによる輪切り体験をしてもらいました。「林業は人や自然環境のために、なくてはならない仕事だと感じた」「将来の仕事選択の幅が広がった」などの声が聞かれ、林業の担い手を選択肢の一つとして具体的に認識してもらえたのではないかと思います。本協議会が携わった高校生の林業体験は一度

＊まとめ
副会長 四田純夫

ですが、これをきっかけに、県が主催する高校生・大学生の林業体験が毎年行われるようになり、県内の広がりも生まれているようです。
このような活動を続けていくことで、どの世代にも森林との関わりが生まれ、森林が身近な存在になっていくと信じています。
今後も「次世代へつなぐ山づくり」を目標に、会員一同、協力し、さらに工夫を加えながら活動を続けていきたいと考えています。

した林業体験などに取り組んでいきます。
**15年目を迎えて
地域に根付く
森林環境教育**
地元の小学校6年生の課外活動は年に2回行っています。スギの各成長段階の見学、伐倒作業の見学のみならず、クラフト教室、植栽、根踏



ドローンで撮影。上空から見た自分たちの姿や手入れしたスギに感激



チェーンソーの体験（高校生）



高性能林業機械を見学（高校生）

事

私たちのチャレンジ！

例



薪の生産・買い取りと販売を兼ねた薪ステーション

五名里山を守る会「香川県」

薪販売で持続可能な里山づくりを！

薪・炭・シイタケ原木の生産が活動の中心

五名里山を守る会（会長・木村薫、会員数11名）は、香川県の東部に位置する東かがわ市五名地区で活動をしています。当地区は、昭和30年代のピーク時には1200名ほどが暮らし、200名以上が炭焼きに関わる林業が盛んな土地でした。現在は300名ほどが暮らしていますが、炭焼きに関わるのは本会に所属する4名だけとなって

います。

本会の活動の中心は薪、炭やシイタケ原木の生産事業です。里山の利活用の一環として設立当初から独立採算で行っています。

顧客の要望を取り入れて商品づくり

1年間の活動は冬にはじまります。11月から2月に自分たちで薪用の丸太を伐り出すとともに、地域の方や森林組合からも丸太が持ち込まれてきます。それを3月下旬から6月に玉切りや薪割りをし、10月から1月に箱詰めをして出荷します。薪が、東かがわ市のふるさと納税の返礼品となったことを受け、令和元年度には、新たに薪置き場と薪ステーション



薪用の丸太の集材。クヌギ・コナラを重宝

を建設して薪の増産に取り組みました。現在では年間150tの薪を販売しています。



▲薪をウッドバックやラックに入れて乾燥させる
 ◀玉切りした丸太は、エンジン式の薪割機（26 t）を使用して薪割り

順調に進む一方で課題もあります。現状では、増える需要に対して薪の原木が足りていません。WEBサイトやチラシでPRをして少しずつは集まってきているもの、もっと買い取り量を増やす必要があります。自前で集められる薪は例年20〜30tほどなので、今年からは個人の方からの買い取りも本格的にスタートしました。まだまだ技術・経験が不足していますが、地道な経験の積み重ねと柔軟

また、令和3年3月にWEBサイトを開設したところ、新規の購入者も徐々に増えてきました。リピーターにもつながっており、そのようなお客様からの要望も取り入れながら試行錯誤を繰り返しています。たとえば、以前は中割ぐらいのサイズの薪でそろえて箱詰めをしていましたが、今は大割を中心に、中割・小割も適度に混ざるように作っています。

新たな事業展開としては、目下安全な作業を目指しています。な発想による知恵で、効率的かつ安全な作業を目指しています。



薪の箱詰め出荷作業。最盛期には1カ月で約2000箱を出荷

**ここでしか
体験できない
事業の展開を**

新たな事業展開としては、目下安全な作業を目指しています。

ここでしか体験できない事業の展開を

から「キャンプ場に良い場所ですね」というお声をいただきました。薪ステーションの薪でのごまき火、五名の炭でのジビエバーベキュー、星空観察を売りにしていきたいと思っております。また、五名の里山は植物を見ながらのトレッキングや星空観察そして炭焼き体験に最適です。ジビエ料理とコラボすることでここでしか体験できないツアーを作れたらと思っています。

＊まとめ
 五名里山を守る会
 薪ステーション責任者
 戸井裕孝

WEBサイト
 「五名里山を守る会」
 五名の薪
 gonmyo-maki.com

木の循環利用を学校林で丸ごと体験

FW・OGACHI(フォレストワーカー・ドット・おがち) [秋田県]

学校林で
主伐と再造林の構想と連携

FW・OGACHIは、秋田県の内陸南部、湯沢市と雄勝郡の3市町村にて7名で活動しております。時代はSDGsやカーボンニュートラルのまっただ中、FW・OGACHIメンバーも地域林業の振興に携わりながら森林資源の循環利用や森林のカーボンニュートラルへの貢献について普及啓発に取り組んでいるところです。

今回は、学校林を所有している湯沢市立山田小学校と山田中学校において主伐と再造林の構想があることを聞いた当グループが、所管の林業普及指導員らとともに学校林を活用して子どもたちが森林資源の循環利用を体験し、カーボンニュートラルにおける森林の果たす役割を学んでもらおう、と活

事

私たちのチャレンジ!

例

実感①「木を伐る」



実際に学校林の木を伐る現場をその目で見て、伐採されたスギの木を触り、肌で木を感じていました

動したものです。

五感で「実感」を重視

具体的には「木を伐って木を

出して木を挽いて木を使って

また木を植えてそして森を育てる」といった一連のサイクルを

自分たちの学校林で体験しちやお

う! という大胆かつ、ある意味

恵まれた体験です。ただ、内容が盛りだくさんになりましたので令

和3年と4年の2か年で4回の実

実感③「木を使う」



学校に戻り、見学した製材工場から生産された木材を用いて本棚を製作しました

実感②「木を挽く」



製材所の見学では木材から香り立つ匂いにも感激していました

実感⑤「森を育てる」



今回主伐しなかった若齢の学校林に移動しての枝打ち体験は、使い慣れない高枝のこぎりでしたが、みな汗をかきながら作業に熱中し、大変さも実感できたようです

実感④「また木を植える」



伐採跡地にて自ら苗木を植えて再造林を体験しました。自分たちの手で学校林を未来の後輩たちにリレーできたことを誇りに感じてほしいです

実践となりました。
ここで当グループが心がけたのは、いかに「実感」してもらうか

です。知識は室内などで習得できますが、今回は自分たちの学校林での林業を実感できるまたとない

機会ですので、学校の先生たちと十分に相談をして、安全に、五感を通して感じてもらうことを重視

しました。「迫力ある伐採現場や製材所をその目で見る」「大きな音を聞く」「伐りたて挽き立ての木の匂いを嗅いで触る」「植栽・保育作業に汗を流す」などです。

SDGsと実習がマッチ

小学5年生から中学3年生を対象にした実習でした。子供たちはちょうどSDGsについて勉強中だったこともあり理解・飲み込みが早く、学習中は答えきれないほどのたくさん質問を浴びせられタジタジにさせられました(汗)、より森林に興味を抱いたようです。

今回、学校林を使って森林資源が循環していることと、大切さを子供たちに実感してもらいました。将来を担う次世代の中から、森林・林業に携わる業界へ進んでいく子供たちが大勢現れることを期待して、引き続き啓発活動を実施していきます。

*まとめ

雄勝地域振興局
林業普及指導員 望月明剛

(所属は執筆時)

事
私たちの実践
例



マツタケと薪ストーブに魅せられて

頸北^{けいほく}林業研究会「新潟県」／小池秀則さん

マツタケ林再生の夢から
林研参加へ

私は一度、高級旅館でマツタケ三昧の食事をしたことがあります。以来、マツタケの香りは私の脳に刻み込まれています。私が住む上

越市柿崎区米山^{べいざんじ}寺地内でも、昭和40年代まであちこちでマツタケが採れていたと古老から聞いていま

した。そこで私は、農山漁村文化協会出版の「新特産シリーズ マツタケ」を購入してマツタケ林再生技術を独学しました。勉強し始めて、とても1人

理科・生物)でしたので、土曜日のみ参加していました。

マツタケは断念したが林研活動は広がる



頸北林業研究会のメンバー



9シーズン使った、薪ストーブ

でできる作業ではないと諦めていた時、頸北林業研究会(以下「林研」)のマツタケ林の再生を目指した活動を耳にしたのでした。すぐに参加することにしました。

林研の活動場所は、隣の吉川区です。活動は週2回(水・土曜日)でしたが、当時私は現役の教員(高校

マツタケ林の再生作業は、はじめのうちは順調でした。現場への林道の整備、雑木の伐採と後始末、枯れかけたマツの伐採・消毒・積み上げ・シートでの覆いと進みました。ところが、最後の落ち葉かきと腐葉土の除去作業を残した段階で、終わってしまいました。借りていた土地で相続問題が起こり、林研で使用できなくなったのでした。

こうして私の夢は中断しましたが、その後も林研の活動を続けています。スギ林の間伐、モウソウ

チク林の整備、シイタケのほだ木の伐採など作業は多岐に渡ります。また、高校生を対象に「森の仕事体験」と銘打った教育活動や、小学生の森の学習にも取り組みました。チェーンソーの整備・目立て、ナタ研ぎなどの



薪割りに使うオノ、掛矢、矢（金属のクサビ）

研修も年に1回は行っています。

なつて理解しています。

薪ストーブのある暮らし

写真の薪ストーブは、この冬で9シーズンを終えました。

導入した直接のきっかけは、母の死です。以前から私は薪ストーブに憧れていましたが、母の生前に居間に設置したいと相談しても、母は反対でした。母の世代は、台所も風呂も居間の暖房（囲炉裏）もすべて薪でした。薪の準備から始末に携わってきた経験から、その大変さ故、反対したのだと今に

薪ストーブを導入した最初の冬は、薪の準備がなかったため、父が残してくれた稲架木と冬囲い材を使用しました。手ノコで切つて薪にしましたが、あまりに手間がかかるので、2年目にはチェーンソーを購入しました。2冬目の薪も、父が残した古材でまかなうことができました。

3冬目は、いよいよ自分で本格的な薪作りを始めました。当初は持ち山の木を伐り出そうと考えていました。ところが、私が薪ストーブを始めたことを聞いた近所の人



マツタケ林再生現場へ続く道の路網整備

や親戚から「屋敷の木を伐つてくれないか」、「倒した木を持って

いってくれないか」など、次々と薪材の提供がありました。この頃から、太い材を割らなくてはならなくなり、オノで薪割りを始めました。しかし、オノの背を金づちで叩いて、1本ダメにしてしまいました。そこで納屋にあった矢（金属のクサビ）も使っています。こちらはナツツバキの掛矢で叩いています。

林研の活動で出た材は、竹でもスギでも持ち帰り、薪にしています。燃やして出た灰は畑にまきま



小学生の「森の学習」で講師を務める

す。

さて、かつて抱いていたマツタケ再生林の夢についてです。1度は敗れた夢でしたが、昨年度から復活しました。別の林業クラブが私の集落内で活動を始めたのです。私もすぐに参加しました。

マツタケが出るのは、うまくいっても5年、長ければ10年後です。それまで健康で事故なく林業を続けたいと思います。

*まとめ

会長 小池秀則

山に生きる姿を子どもたちにもたちに伝える

松阪林業研究会「三重県」

学校林を活用した 体験活動

松阪林業研究会は昭和51年から47年間、三重県松阪市内で活動する研究会です。その時々に応じたさまざまな活動を行ってきましたが、最近は地元の小学校からの要請で森林教育のお手伝いをするこ



教室での講義

とが多くなっています。松阪市立大河内小学校では4、5年生を対象に学校林を活用した間伐体験や、原木シイタケの栽培体験などを行っており、子どもたちに少しでも良い体験してもらえよう、毎年工夫しながら取り組んでいます。

すべての子が参加 できる「体験」を

以前の間伐体験では、学校から少し離れた場所にある学校林で間伐や皮剥ぎ作業を体験し、現地での働きや森林整備の意義についてのお話をさせてもらっていました。しかし山の中だけでは子どもたちに話が伝わりにくいため、最近では事前に森林教育の講義を1、2時間行ってから、学校林での体験活動をしています。

昨年はクラスに障がいを持つお



校庭での皮剥ぎ作業体験の様子

事

私たちのチャレンジ!

例

子どもさんがいて、その子は学校林へ入って体験することが難しいとのことでした。何とか一緒に体験し

てもらおう方法はないか先生方と検討し、研究会のメンバーで間伐した丸太を校内に運ぶことになりました。校庭で直接木に触れな

がら、皮剥ぎや手ノコによる玉切りをする体験活動です。学校の中だったので、障がいのあるお子さんも一緒に参加でき、皮を剥いだ時のなめらかな木の感触や香りを、みんなでも共有することができました。



菌打ち体験



本伏せの様子

栽培体験は、学年を超えて学習をしています。4年生で菌打ち・仮伏せした原木を5年生で本伏せします。5～6年生で収穫をして、卒業時には原木を自宅へ持ち帰るという流れです。また、仮伏せの意味を理解してもらうため、5年生が本伏せを行う際、仮伏せしていた原木にナタ目を入れます。そうして1年かけてシイタケ菌が原木に回る状況を見てもらいます。

実際の原木栽培に近い体験を

最近では、原木栽培は時間と手間がかかるため、生産者が減少しています。しかし地域の里山を守りながら、自然の営みを上手に利用して行う原木栽培の良さを少しでも子どもたちに知ってもらいたいです。

◆ 時の流れとともに社会が森林に求めることも少しずつ変わってきますが、私たちが地域の山とともに生きる姿勢は変わりません。これからも地域に寄り添い、森林整備の必要性や地域産業の良さを子どもたちに伝えていきたいです。

*まとめ

会長 川井逸夫



収穫の様子

事

私たちのチャレンジ!

例

体験教室で森林の魅力伝える

栃木市林業振興会「栃木県」

森を育む人づくり

栃木市林業振興会では「森を育む人づくり」をテーマに、森林環

境譲与税等を活用し、林業体験教室などを開催しています。体験教室を通じて、会の設置目的のひとつである「地域林業の振興」の実現に向け、

継続的に取り組んでいる活動を紹介します。

まず小学生を対象とした「林業体験教室」についてご説明します。この活動は、会のメンバーが所有する森林を会場として、地元の森林組合と提携し、地元の小学6年生の児

童に間伐体験をしてもらっているものです。例年、小学校が夏休みとなる7月下旬から8月上旬のうちの1日で実施しています。

グループごとに1本ずつ、事前に振興会のメンバーが選んでおいた木の伐倒、玉切りを順番で体験してもらい、即席コースターを作るという内容です。

参加する児童の多くが山の近くに住んでいるのですが、実際に山仕事を目にしたことのある児童は

少ないため、林業に対する理解と関心を深めてもらう貴重な機会となっています。

伐倒後、玉切りをして、即席コースターが完成



栃木市林業振興会のメンバーの指導を仰ぎながら、児童が伐倒に挑戦中





屋外に出てバーナーであぶり、焼き色をつける。普段できない活動で楽しそう



親子で協力してプランター作り。くぎを打つ位置に印をつけている様子



ホタルとカワニナを流れの緩やかな川に放流。無事にふ化しますように!



講師の先生によるホタル講座。小学生は資料とにらめっこ

森林の多様な 姿に親しむ

次に、「水とみどりのふれあい体験教室」についてです。

この活動は、栃木市内の流出ふれあいの森を会場として、木工教室、ホタルの幼虫放流会などを実施しています。例年2月中旬の土曜日に実施しており、市の広報紙で児童および保護者を対象とした一般募集を行っています。

ある木材を親子で協力し、くぎ打ちをして組み立てます。最後にバーナーであぶって出来上がりです。ホタル幼虫の放流会では、公園内の川の流れが緩やかなところに、ホタルの幼虫とその餌になるカワニナを放流します。

この教室では、一日のうちに複数の体験をしていただくことで、森林の多面的機能に関する理解を深めてもらうよい機会となります。

グループ活動で 林業を体験する楽しさ

クラスの仲間、親子で話し合いながら作業をすることで、アイデアやコツをつかんで、みるみる上達していくのがわかります。特に小学生や未就学児のお子さんには、みんなうれしそうに作業し、楽しかったという声を多くいただいています。

今後も継続的な活動を通じて、地域林業の振興を図っていきたくと考えています。

*まとめ

会長 篠崎藤重

事

私たちのチャレンジ！

例



Google Earth で法 14 条地図（登記所に備え付けられている地図）の所有界を表示させたところ

スマホを持って 所有林を探しに行こう！ 大江町光林会「山形県」

若い世代に
興味を持ってもらう

近年、全国的に所有者不明土地が社会問題化している中で「山林を相続したが所在が分からない」「地籍調査が終わっているのに杭

が見当たらない」「所有する山林の場所を子や孫に伝えたい」といった森林所有者の声が多く聞かれます。このような現状に対し、

大江町光林会（以下、光林会）は、若い世代に興味を持ってもらうにはどうしたらよいかを考え「スマホを持って所有林を探

しに行こう」研修会を開催することにした。

地図アプリを 使って 境界線を歩く

研修会の内容は、スマートフォンで地図アプリを使って自分の土地の地籍データを表示しながら所有林を探す

方法と、山林相続の基礎知識を学ぶというものです。

専門的な知識が必要なため、地域の専門家にも協力を求めました。最初に、研修の意図を明確にすべく、各組織の思いや得意分野を話し合い、次のように状況を共有しました。

・山形県行政書士会／相続等の相談を受けている所有山林の不明確などの問題に直面している

・山形森林調査協会／ICT技術に精通しており、森林境界明確化業務等を受託している
・光林会／所有山林の管理や相続に関する不安や悩みを持つ当事者

・山形県村山総合支庁／森林経営管理制度や森林ノミックスの



大江町光林会は昭和56年4月に発足。25名（男性21名・女性4名）で活動中

法14条地図／登記所に備え付けられている地図。

土地の位置及び区画（筆界）を現地に正確に再現できるとされています

推進には、山林の相続や境界の明確化が不可欠と認識している



当日は、行政書士会と山形森林

調査協会に講師を務めてもらい、

次のような内容で行いました。

①山林の相続の話（相続税の基礎、所有者（共有者）不明森林への対応など）

②山林相続の留意点（境界確定、土地の所有者届出制度、法改正・国庫帰属法など）

③法務局から地図（法14条地図）を入手する方法、地籍調査の状

況

④法14条地図を位置情報付のデジ

タルデータ（KML形式）に変

換する方法

⑤スマホにGoogle Ear

thをインストールし、KML

データを表示させる方法

⑥スマホを見ながら現地の境界線

を歩く（杭を探す）

自分がやりたかったことはこれだ！

今回は光林会の会員とその後継者等14名が参加し、方法を学ぶと

ともに、一般に広く普

及していくための手法

の検証も行いました。

参加者は自分のスマ

ホを見ながら境界線と

杭を探し、自分が動く

ごとに地図アプリの中

の自分の位置情報も一

緒に移動していくこと

を確認し、とても感動

した様子でした。

【参加者の話】

前から帰ってくる度

に親と一緒に山に行っ

て、場所を聞いたり写

真を撮ったり動画を撮った

りして覚えようとしたが、

後でみると全然分からな

い。何か方法はないだろう

か？と、いろいろ調べて

いたが、これといったもの

が見つからなくて困ってい

た。今回参加してみても「自

分がやりたかったことはこ

れだ！」と思った。

（首都圏から帰省し親と一

緒に参加した後継者の方）

場所もわからず困ってい

たが、今回の研修会はよ

かった。これでじいさんからの土

地も分かるようになると思うと、

気持ちも軽くなるよ。

（祖父が亡くなって半年後に親を

亡くされた方）



前述の研修会は令和4年11月の

開催でしたが、令和5年1月23日

から、登記所備付地図の電子デー

タがG空間情報センターを介して

インターネットで一般に無償公開

されており、これを用いた「MA

PPLE法務局地図ビューア」(株

式会社マップル)の利用が可能に

なりました。



スマホで確認して境界を歩く参加者。集約化後の間伐施業の記録への応用も検討中

このため光林会では、令和5年

9月22日に、このビューアを用

いた「スマホで探そう自分の森

林、手入れをしよう自分の森林

」と題した研修会を「大江町美し

い、この手法の有効性が大江町長

はじめ町内の森林業者関係者に認

識されました。森林所有者の立場

に立った大江町光林会の取組みは、

また1歩前進しています。

*まとめ

山形県村山総合支庁森林整備課

森林総合監理士 工藤吉太郎

事

私たちのチャレンジ!

例

宮崎県産「原木椎茸」を 食のプロを通じて世界へ発信!!

高原町林業研究グループ「宮崎県」

駒打ち体験を通じた 木育活動

高原町林業研究グループは、農林業を生業にしている平均年齢60歳代の会員3名で活動しています。約15年前から地元のイベントなどで、原木椎茸駒打ち体験を通じた木育活動を行ってきました。また宮崎市で行われる特用林産物即売市などでも、原木乾椎茸のアピールをしています。

私は高原町林業研究グループの一員として活動するとともに「田中椎茸」のブランドで、原木椎茸の生産や加工、販売を行っていますので、その取り組みを紹介いたします。

原木椎茸の 良さをアピール

多くの消費者は原木椎茸と菌床椎茸の違いが判別できず、今やキノコ類の一部でしかない現状があります。原木椎茸の生産は、昔な



がらの生産方法で手間がかかりますが、安全・安心で食感も良く、うまみがあります。これから先は、省力化（機械化等）に取り組んでいかなければならないと感じています。しかしながら、

生産工程が人力作業で、重労働の割には安値で取り引されており、後継者不足の要因にもなっています。

私は、原木椎茸を少しでも高値で販売できるように、10数年前から6次産業化に取り組んでおり、有機JAS認証やひなたGAP認証（※1）も取得し



地元のイベントでの原木椎茸駒打ち体験

ました。また、林研会員として県林研連主催のイベントなどでも原木椎茸の良さをアピールしながら、試食販売等を行ってまいりましたが、しんもえだけ新燃岳噴火の際には降灰による被

※1 ひなたGAP認証／農産物の適正な作業手順や物の管理を行う手法、GAP(GoodAgriculturalPractice)の宮崎県版



森林・林業に関わりや興味がある女性の交流会「ひなたもりこ」の料理講習

用したガラディナー（※2）が東京の一つ星レストランで開催され、原木椎茸を提供することになりました。都心の著名なシェフが集まる試食会ではシェフ目線の辛口コメントがある中、「五感で味わえる、こんなにおいしい椎茸を食べたことがない」と絶賛していただきました。そこから話が広がり、令和5年11月

9日に東京で開催されるフランス料理コンクールの決勝の場で、田中椎茸の原木椎茸が食材に決定し、コンクール後の受賞パーティーでも原木椎茸を使った料理が振舞われることになりました。

令和6年1月15日にはヨーロッパでのプロモーションも企画されており、胸躍る日々を過ごしていきます。原木椎茸が海外展開への架け橋となることを期待しております。

このようにプロのシェフのみな

まとめ
会員 邊木園浩子

さまのお力添えで世界へとつながり、原木椎茸の需要拡大、販路拡大に前進することができました。私たちの活動を通じて「生産者が元気になる!!」「後継者につながる!!」ことを目指し、原木椎茸生産者の存続のために、これからも頑張りますので、応援よろしくお願いたします。

海外展開への架け橋になることを期待

害で全ての椎茸を廃棄しなければならなかったこと、新型コロナウイルス感染症の影響により消費が激減したことにより、大きな打撃を受けました。

このような中、私は県内のフレンチシェフに協力していただき、原木椎茸を使ったディナーの開催、調理師専門学校での調理指導やコンテスト・原木椎茸のレクチャー等を行ってきました。

令和5年1月には、県産品を使



プロのシェフによる原木椎茸を使った料理の数々



県内各地で開催したディナー

